

華やぐ日

高橋たか子



華やぐ日

一九七五年七月十二日 第一刷発行

著 者 高橋たか子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号二二二
電話東京〇三九四五―二二二（六代表）／振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社

定価はカヴァーに表示してあります。



落丁本・乱丁本はお取り替えます

© Takahashi Takako 1975, Printed in Japan

目次

晴 間	熱 い 日	疑 惑	昔 の 街	華 や ぐ 日
195	171	135	85	5

装帧·司修

華やぐ日

華
や
ぐ
日

絹子は夕方、東京駅のホームに立っている時、H行とかS行とかN行という行先のプレートをついた、遠距離の寝台列車が、隣のホームに停車しているのを見かけることがある。暗い宵の空をバックにして、そんな列車だけが、他の近距離の列車とはどこか全く違って、晴れがましい明りを灯している。すでに寝台のしつらえられた車内が見え、乗客たちがゆったりと通路を歩いている。乗客というより旅人というほうが似つかわしくて、彼らはなにか自分自身のための大きな目的にむけて、発車を待つふうに見える。窓の明りの色までがぼうつと夢みるように潤んでいる。そうなのだ、東京駅のなかで、いや、東京都のなかで、本当に夢という言葉を当てはめることのできるものは、もしかしたら、旅立ちを待つ、この遠距離の寝台列車だけかもしれない。待つ気持の喘ぎのように、重たい車輪のところから、白い蒸気が時折噴きでているのだった。

じつは、いま絹子は、そんな寝台列車に乗って、逆に、窓から東京駅を見おろしているのである。もっと早く行ける手段があるというのに、わざわざこれを選んだのは、隣のホームから眺めていた寝台列車のたたずまいのせいだろう。

幾つものホームを、くろぐろとした通勤帰りの人波が絶えまなく往来しているが、人声はすこしも聞きとれず、駅全体が一つの大きな眩きようなものでわあんと反響している。一人一人の鬱屈した独りごと、一人一人の猛りたった怒り、一人一人の晴らしようの

ない不満、それらが混じりあい、一塊りになって鳴っているのだ。

だが今夜は、絹子は彼らの一員ではなかった。生れてはじめて乗る、寝台列車というものの乗客となって、華やぐ日にむけて旅立っていくからだ。華やぐ日——。八月八日を、絹子は自分でそう名づけていた。まっすぐに目的地に行かずに、途中で二泊していくことに決めている。列車での一泊があるから、今日から三日目が、その日なのだった。だがこんな旅立ちを、半年前の絹子は予想もすることができなかったらう。事の起りは、あの教授室での会話だった。

「知ったことは既に知っていたのだ、と、ずっと以前、お聞きしました。あれはどういうことなのでしょう？」

絹子は哲学科の主任教授の部屋で、そう訊ねた。三十二にもなって、ふいに思い立ち、会社勤めをやめて、母校である大学の哲学科に今年の春学士入学したのは、この教授のこの言葉を、或る日ふいに思い出したことがきっかけになっていた。

「何かに本当に会おうということは、じつはそれ以前に出会っていたのだ、というふうに言いかえてもいいのです」

教授は言い、大きな回転椅子をなかば回して、立ったままにいる絹子に、腰掛けなさいという手の仕種で、ソファをさし示した。絹子が文学科の学生であった頃、まだ助教授で

あったその人は、もともと皮膚を骨に貼りつけたような顔をしていたが、いまでは一層その感じを強めている。

「それでは失礼いたします」

絹子はすこし会釈して、ソファに腰を落した。教授の回転椅子よりずっと低くて、位置も向きあっていず、ななめ上を見あげる恰好になる。この部屋に入るのはまだ二度目だったので、よけい自分の居所が定まらない気がする。

「どうしてまた大学へ戻ってこられたのですか。時折そういう人がいますかね」

教授は煙草を喫わないので手持無沙汰なのか、右手の人差指で、机のへりを機械的に撫でている。その姿勢で話をする時、いつもそうするらしく、へりのその部分がひどく減っていた。

「なぜって？」

それを言うことは難かしかった。いや、生きていて、何かをした時、その理由を言うことの難かしさというものを知るようになったことが、もしかしたら哲学を底から勉強してみようという気持を起させたのかもしれない。必然というものの直線の上を歩いているつもりだったのに、いつのまにか偶然の点の上を跳んでいる。自分が理由をもって選んだのではない、そんな点が、行方もしれず自分を流していく。三十になった頃から、絹子は自

分の正体が掴みどころがなくなるのを意識するようになっていた。

「知ったことという言葉は曖昧ですね。認識したことというふうに考えられると、すぐにおわかりでしょう」

教授は話を元にもどした。

「認識したことは既に認識していたのだ、と？」

絹子は言葉を置きかえて、訊ねなおした。

「そうなのです。既に知っていたことへむけて、人は戻っていく。つまりですね、人は生れる以前から、認識の元型をそなえていて、生きるということは、この元型を夢みることだといえましかね」

哲学の教授らしい、この時代錯誤ともとれる考えかたは、時代を先取りする考えかたばかりが泡のごとく生成消滅しつづける、大都会の只中に自分を晒していると、むしろ奇妙に懐かしく思われてくる。

会話は十五分ばかり続いたろうか。絹子は部屋の一つの壁面に貼りつけてある、等身大の鏡に、その間、ちらちらと眼をやっていた。そこには、部屋の窓の外が不思議なほどの鮮明さで映っているのであった。そのことは、はじめてこの部屋に入ってきた時も、今回二度目に入ってきた時も、入口で絹子の氣持をそそった。ドアをあけて一步室内に踏みこ

むと、すぐに衝立があり、それで遮られた視線を、右のほうに移してしまふことになる。

その右手の壁面で、何よりもまず、鏡のなかの風景が、絹子の眼を撃ったのであった。わざと翳りを充たしたかのようなこの建物の一室にあって、鏡の奥の空間だけが光を充たしていた。細かい芽の萌えでばかりの銀杏の太木が映っていて、その若やいだ草いろの塊のむこうに、青い空がはるばると拡がっている。空の一角に、煉瓦造りの建物が見える。

一度目も二度目も、絹子は入口で、その風景の赫やきを、一瞬、凝視したのだった。視野を閉ざされた暗い位置に立っているせい、または赫やきの強さのせい、鏡は何処にもない場所を映しているふうにみえた。そういうことはありえないわけで、衝立をまわって、さらに室内に入ると、窓の外に、鏡にあった風景が望まれた。

ソファに腰掛けていると、入口とはすこし角度がずれているので、鏡には並木になった銀杏の二本が映っていて、煉瓦造りの建物はもっと迫り出してきた。だが、鏡のなかの風景が実際の風景よりもきらめいていて、果てしない奥行を感じさせることには、変わりはない。

「あの鏡の中と、実際のものと、どちらが本当なのでしょううか」

絹子は訊ねてみた。世間で口にするれば笑って馬鹿扱いにされかねないこんな質問を、真面目に口にするというのができるというのも、この哲学科の部屋という場所のおかげだと思

う。教授が黙っていたので、絹子はさらに言いなおした。

「普通、人は、ここに在るものだけが、在るものだと思いますね。それがそうでないなどと言うことは、許されないほどですね。ところが、ここに在るものはむしろ虚像であって、鏡に映っているもののほうが実像なのだ、と私は考えたいのです。それがそうでないと決める拠りどころは、どこにもありませんものね。現に、鏡の中のほうが、ずっと光があり、ずっと遠くに通じています」

絹子は一気に言った。教授はあいかわらず黙っていて、すこし俯き加減になり、歯痛でもこらえるふうな、眉根をよせた表情でいる。

「どこか御気分でもおわるいのですか」

絹子はやむなく訊ねた。

「いや、私は思い出しているのです。或る男の名前をね。どうも思い出せなくて」

教授はやっとこちらに眼をむけた。皮膚が骨に貼りついていただけの顔である。昔からそうだったし、現在もそうなので、年齢がわからない。

「この部屋の入口に立った時、まず鏡が眼につきましたので」

絹子は自分のせつかくの話題を教授にはぐらかされた気持になり、声の調子を落して、取りつくろうふうに言った。

「じつは、その男も、そう言いましたよ」

教授は言った。年齢のわからぬ顔が、その時すこし生気づいた。

「誰ですか」

絹子は気持をとりなおし、また声を高めた。

「すこし待ってください。いま思い出します。あなたと全く同じことを言った学生が、ずっと以前いましてね。不思議なことだな、そっくり同じことを言った」

「やはり哲学科の学生？」

「そうです、それは確かです」

教授がそう言ったとき、二人の間に沈黙が続いた。窓が閉めきつてあるので、外の物音は届かない。コンクリートの廊下をゆっくり歩いていく固い靴音がし、それが無機的な響きで一直線にすすんでいくのが一分間ぐらい聴きとれ、ふいに、階段を駆けおりていく、どこか人間臭いにぎにぎしい音に変わって、ぼそと消え、そしてまた絹子は室内の沈黙に向き合っている。靴音に耳を傾けながら、絹子は考えていたのだ。自分と同じことを言った人がある、自分と同じように見る人がある、と。いま通っていった靴音の主は、もしかしたらその男かもしれない。男の存在に気づいた絹子に、合図をするふうに、そばを擦過していったのかもしれない。

「その人はいったい何についてどのように言ったのですか」

絹子はもっと正確に知りたかった。

「この部屋の鏡のことを、あなたと同じようにね。ああ、それから、銀杏のこともそうでした」

教授は回転椅子をぐるりと回して、軀ごとこちらを見た。

「銀杏がどうしたのですか」

絹子はすこし上半身を乗りだした。

「大学の構内に銀杏の木がありますね」

「そこに見える、並木ですか」

「いや、西の端のほうに、一本だけぽつんと、古い大きな銀杏があるのです。私はその男と歩いていたのです。冬でしたので、葉はなくて、ごつごつした梢を、曇った空にひろげていました。と、その男は、その梢が根だと言います」

「ああ、わかりました」

絹子は弾む気持で応じた。

「わかる？ どうわかるのですか」

「でも、どうぞ、お話を続けてください」